

### 3. タイ王国での面接調査結果

#### 1) 調査の目的

われわれが、調査対象国としてタイ国を選んだことには理由がある。それは、今回の量的調査の結果で、タイ国の対象者が他国の対象者とは違った反応を示していたからである。

たとえば、調査の対象となったタイ女性は、韓国人と並んで際立って多く、それぞれ約35%、この二つの国を合わせると70%に達していたことである。しかし、タイ人と韓国人とではその特徴に大きな違いがあった。具体的には、タイ人は多額の負債を背負って日本に来るが、韓国人の負債はきわめて少ないし、さらに、タイ人は売春を目的として来日するものが多いが、韓国人の場合はそのような人が少ないのである。このことから、当然のことながら、「なぜタイの女性が？」という疑問がわく。タイでは深刻な女性のトラフィッキング (Trafficking) が行なわれているのかも知れない。

また、今回の対象者の中で、何らかの理由で日本に再び戻りたいとするものが約40%で、この数は韓国人よりも多い。他の研究資料<sup>2)</sup>によれば、彼女たちは日本でかなりひどい目にあっているはずである。にもかかわらず、どうして再び日本に戻りたいなど考えるのだろうか。

さらに、対象者の年齢に着目すれば、他国と比べて、タイ人の場合は比較的高齢で、30歳を超えているものが多い。彼女らの主たる「来日目的」から考えて、常識的には、少し年齢が高いように思われる。「なぜ若い人が少ないのだろうか?」。そこにはタイ特有の何らかの事情があるのかも知れない。

日本のタイ大使館の推定によれば、8万~10万人のタイ女性が日本の性産業で働いているそうである。<sup>2)</sup> 2000年の現時点では、前述のタイ大使館のラチャウエート領事がいうように、その数は明らかに減少しているとはいうものの、今回の調査対象者数はきわめて少なく、結果がサンプルを代表しているとは思われない。しかし、今回の実態調査は、われわれにいくつかの問題提起をしてくれた。その一つが、今回の量的調査では知り得なかった重要な「何か」が、タイ国にはあるのではないかということであった。

今回のタイにおける面接調査の主たる目的は、以下の三つに要約される。

- ①タイに特有な「性」と関連する社会・経済的・文化的背景を探る。
- ②タイにおける女性のトラフィッキングの実態を知る。
- ③日本で性産業に従事していたタイ女性の体験談から問題点を探る。

## 2) 関連施設での調査

今回訪問した関連施設は、①DEP (Development and Education Program for Daughters and Communities)、②Empower in Mae Sai、③職業訓練センター (Protection and Occupational Development Centre) の3ヶ所である。以下のところで、それぞれの施設についての面接調査の結果について述べる。

### ①DEP (少女とコミュニティのための教育・支援施設) について

この施設は、売春に行く可能性の高い少女を保護し教育することを目的として、1989年にタイ人と日本人の2人のボランティアによって、タイ北部のチェンライ県メイサイ郡に設立されたものである。この施設の運営はNGOによってなされている。われわれが訪れた時には、タイ人の職員に混じって、フィンランドの女性と、ニュージーランドの女性が活躍していた。

チェンライ地方は農村地帯で、昨今の工業化の波の中で貧困の度合いを深めている。この深刻な経済的貧困さが、この地方の小学校、もしくは中学校を出たばかりの娘たちが、バンコクなどの都会の性産業に働きに行くということを増やす原因になっているそうである。それを防ごうというのが、この施設の主たる目的ということになる。

現在(2000.3.14.)、この施設には6歳から19歳までの子どもたちが64人収容されている。内43人が女児で、21人が男児である。この施設に男児が来るようになったのは最近で、両親の死亡などの理由によるそうである。実際、両親がHIVによって死亡した、いわゆるHIV孤児が20人いるとのことであった。また、ここにいる子どもたち以外にも、200人ほどの子どもたちに、学費援助等の経済的な支援をしているそうである。

われわれがここを訪れた理由は、この施設の活動状況を知るためではない。われわれの知りたいことは、このような子どもたちが少なからず存在するこの地方特有の「事情」である。

たとえ貧困という経済的な事情があるにしても、なぜ娘たちは易々と性産業に行くのだろうか。また、なぜ親たちは、自分の娘が売春をすることをわかって送り出すのだろうか。さらに、この地方では、日本に「出稼ぎ」に行く娘たちが多いと聞くが、その理由は何なのであろうか。これらの点について、この仕事を長年に渡って経験しているタイ人の所長さんにうかがってみた。彼の答は明確であった。その答を要約すると以下のようになる。

「タイ国が進めている工業化は、農村の働き手を安い労働力として都会の工場に集中させた。その結果、農村は極端に疲弊した。農業が成り立たなくなったのである。」

しかし、問題は経済的な疲弊よりも、伝統的な精神文化が損なわれたところにある。彼らは、都会に出ることによって、物質的な‘豊かさ’を知った。具体的には、テレビ、ビデオ、バイク、ファッションなどなどである。つまり、彼らは物質志向的な価値観を持つようになったのである。やがて彼らは、借金をしても‘便利なもの’を買うようになる。つまり、支出が収入をたえず上回ることになるのである。

より多くの収入を得るために行く父親の出稼ぎは、その家庭の崩壊と深く関わっている。というのは、出稼ぎ先での浮気で、家をかえりみなくなるチャンスが多くなるからである。母親も若い恋人を作って子どもを置いて家出したりすることがある。加えて借金地獄である。家庭はバラバラになってしまうのは当然である。そこへエージェントが巧みに働きかけてくる。つまり、娘を売れというのである。

もちろん、今でも売春は‘悪い’という文化は存在している。他人から娘が‘売春婦’などと面と向かっていわれたくない気持ちはまだ残っているはずだ。しかし、村に娘を売春で稼がせる親が増えてくれば、皆やっているからということでその‘悪さ感覚’の度合いが薄まる。このような価値観、もしくは精神的文化の変容、もしくは崩壊は、この2～30年で急激に加速された。

加えて、タイには、娘が親の面倒をみるという伝統がある。この伝統が、皮肉にも、娘に売春させることを‘合理化’させているところがある。つまり、娘は‘何をしても’親の面倒をみるのが親孝行である、というような考え方になってくるのである。

一方、娘たちの方にも大きな価値観の変化が起こっている。つまり、彼女たちにも‘何をしても’物質的に豊かな生活をしたいという欲求が強まってきているのである。彼女らは、農村での生活よりも都会の生活やファッションにあこがれている。現在は、必ずしも、彼女たちが親孝行するために泣く泣く都会の性産業に働きに行くというような状況ではないようである。

このように、親の方も娘の方も、売春に対する罪悪感が希薄化すれば、そこに残るのは‘お金’の追求という価値観である。そこで彼らはより効率的な稼ぎ場所を探すことになる。その場所が‘日本’である。タイの人たちは、日本人は金持ちであると思っている。タイにいる日本人を見ていると金持ちそうだし、また、日本の性産業に出稼ぎに行った人たちが村に帰ってきて立派な家を建てているのを見れば、彼女たちの気持ちが日本に向かうのは当然のことではないか。とにかく、この地方の状況が変わらない限り、これからも日本へのセックス・ワーカーの流失は続くだろう」

このような所長さんの発言には、どうしようもない世の中の流れに対するイ